
Uncanny valley

Awakeevening

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Uncanny valley

【著者名】

N7611Y

【あらすじ】

Awakevening

みんな誰もが経験したこと

湿り氣のある土を、疎らに割れた瓦が夥しく覆っている。しかし、宵からの雪により、今はその多くが隠れてしまつていて見えない。その中で、一筋の堀建て柱だけが、その土地のかつての姿を踏襲するよつて、白く立ち尽くしている。

ここは、どうも家屋であつたらしいが、小綺麗に整つたこの一角が、さながら夢の島のようなそれを許すとは思えない。

ここを通りすぎるだけの僕に真相は知る由もないが、とにかく奇妙な光景に間違ひなかつた。

立ち止まる僕を、期せず見慣れない制服が追い越した。
女だった。白い蒸氣を上げながら、何やら携帯電話で話し込んでいる。

カーディガンを着ているため、どの学校の生徒かは分からなかつたが、背丈や骨の秀でた顔立ちからして、おそらく高校生だろう。融雪された路肩のみぞれを、鈍く光るローファーで踏みしめながら歩いている。

もちろん、それを疑う余地はなかつた。

夕暮れ時に、駅前のこの道を通る女子高生など、あの瓦礫の山とは違い当たり前の光景であり、いわば注目に値しないものに他ならぬいはずだ。

誰も気にとめるものはいない。気にしていないふりをしていなればならないのだ。

しかし、一種の怖いもの見たさというか、そういう感情が働いたのだと思う。のっぴきならない何かを白田のもとへ晒すためにも、僕は目線をそらすわけにはいかなかつた。

女は携帯電話を切り、ふいに瓦礫の方面へ走り出した。今にも音を立てそうなくらい、蒸氣を盛んに上げている。栗色のショートヘアが揺れ、赤熱した耳が見えた。

「……僕は気づいたが、この現象はどうやら今日だけのことではないらしい。

得体の知れない熱氣みたいなものにあてられた気がして、思わず目をやると、五人ほどの「連中」がすでにこちらへ視線を向けていた。どれもこれも炯々としたような具合で、少なくとも一介の通行人へ向ける視線とは到底思えない。

つまりここに誰もが、あるひとつのはんやりとした事実を見抜き、疑っているのだ。

女はどうとう、瓦礫のさなかへと足を踏み入れていた。

他より少し低まつた立地のそこは、むろん侵入のあとがあるはずもなく、今はまっさらの白い平地のようである。

膝上ほどのチェックスカートをなびかせ、その体はひとつひとつ軽快に、地面へ靴底の陰影を作り出していた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7611y/>

Uncanny valley

2011年11月23日21時47分発行